

「賦」に内包されている衰退への要因

高 橋 庸 一 郎

漢という時代

漢は中国の古代史の中でも最もその威を振るった時代であった。特に武帝の時代は、その前の景帝時代に起った呉楚七国の乱を平定した後で、国内は一定期間の安定を経て、更に四方にその勢力を伸張させようという、対外的に飛躍を目論んだ時代でもあった。西方では、漢代の武人で最もその名も高き衛青が上谷に匈奴を撃ち、衛青の甥の驃騎將軍霍去病が匈奴の渾邪王を降伏させたし、東では、衛氏朝鮮を滅ぼし、朝鮮に四郡を置いたのであった。又西域の安定と経営の為に張騫を烏孫に使わしたのもこの武帝の時代である。又経済的には塩の専売を実施するなど、財政面では、経済学者であり、後には大農丞となった桑弘羊の理論などが世に出て、均輸法も施行され、安定を目指す政策もある程度実現したのである。また司馬遷が己が身に降りかかった屈辱に耐えながら、『史記』を完成させ得たということは、漢という時代が、そこに生きた人々自らがある程度の歴史の上における自己の位置を認識することができるようになったか或いは、そうした認識を獲得することの必要性を強く感じた時代でもあったということの意味するであろう。ということはまた同時に、漢族が地理的にも自己民族の置かれている所の知覚し得る極限的境域の広がりの中での位置を確認することができるようになったという条件がその裏づけになっているということの意味していると言えるであろう。更に哲学の上から言えば、儒者董仲舒が天人感應論を唱えて、人文を天文の反映として捉えることにより、高

きは政治のあり方から低きは人々の実生活に到るまでの人為的事象を、その是非は別として、一定の範囲の枠組みのなかで限定的に、そしてしかも確固として認識できるように成ったのであった。実はこうした多くの方面における世界の拡大とそれらの認識の確立こそが「賦」を作る側にとっても、またそれを鑑賞する側にとっても、必須不可欠の条件であったのである。そういう意味では、「賦」はその作賦者たちの高い才能と、一篇をものにするのに十年以上かかるといわれるような、長期にわたる並々ならぬ努力は勿論であるが、其れとともに、甲骨卜辞、金文、『書経』、『詩経』等に源を発する王侯賛美の美文、また戦国縦横家たちの遊説説得文、それに屈原の騷体文学等、文学史的な意味から、拠って来たところの文学的総体の影響ばかりでなく、上記に示したような、歴史時代的な意味での環境認識という舞台装置が整って初めて完成することが出来た文学ということができるであろう。勿論こうした確認を強調することが決して司馬相如をはじめとする漢代の作賦者たちの才能の評価を低める事にはならないことは当然である。

漢賦の特徴

中国文学史上の多くの文学ジャンルの中で、賦ほどその評価が両極に分かれるものは他にない。前漢末から後漢にかけて活躍した揚雄は、賦の述作については若くから秀でた才能を發揮していた、漢代の作賦家の代表的な存在であったが、彼は晩年作賦家について、賦の本来の役

割である、為政者に対する風刺と諫説がこめられていないという批判的な観点があったらしく、班固は『漢書・楊雄伝下』で、「雄以為賦者、將以風也、必推類而言、極麗靡之辭、閎侈鉅衍、競於使人不能加也、既乃歸之於正、然覽者已過矣、(雄以為、賦は、將に以って風するなり、必ず推類して言う、麗靡之辭を極め、閎侈鉅衍し、人をして加わること能はざるを競うなり、既に乃ち之を正に歸す、然るに覽者已に過するなり)」と述べている。この部分について顔師古は、「觀覽者はただ浮華を得るのみにして、諷諫に益なき事を言うなり」と注をつけている。こういう批判は以後しばらくは続くのではあるが、その後は影を潜めてしまう。其の理由は後にも述べるが、唐代以降、賦其の物に対する関心が、文人達の間から急速になくなってしまふからである。拠って賛美も無い代わり、批判も無くなるのである。ただ最近のことになるが、上海書店出版社から2000年に出された、柳存仁 陳中凡 陳子展など八人による、『中国大文学史 上下』では、賦の初期の作品はともかく、晩期になると王侯の庇護と奨励と賞賛を受けようになり、そうした王侯お抱えの文人達が作った賦は貴族の色彩に漬かってしまい、媚へつらいの玩具と成り下がって、何の価値も見出すことの出来ないものと成り果てたと断言している。(ただこの賦の記述の部分については商務院書館が1948年に柳存仁『上古秦漢文学史』として出した物の再録である。)また昭和十一年に鈴木虎雄によって著された『賦史大要』には、我が国の岡本況齋が、賦は字彙・事典の類の物であるから現代のように辞典・事典が多く出版されるような時代となつては、賦は無用の長物であると言う意味のことを述べていると言う記述がある。つまり賦は事典・辞書と同じもので実用の価値こそあつても、文学的鑑賞の価値はないというわけである。

勿論賦はこのような批判的な評価しか与えられてこなかったと言うわけでは決して無い。日本でも平安時代に編纂された、『本朝文粹』が和風の賦を多く取り入れているのは、当時大陸

での賦の評価が高かったと言う事実を証明するものである。そして其の大陸で、賦に高い評価を与えたのは、賦に拠って称揚される側にあった、武帝を始めとする当時の王侯貴族達ばかりではない。先ほども引用した後漢前期の班固は、『漢書』を著した偉大な歴史家であつたばかりでなく、漢賦の代表的作家の一人でもあつたのであるが、「或以抒下情而通諷諭、或以宣上德而尽忠孝、雍容揄揚、著於後嗣、抑亦雅、頌之垂也(或いは下情を抒べるを以って諷諭に通じ、或いは上徳を宣べるを以って忠孝を尽くし、雍容揄揚して、後嗣に著す。抑そも亦た雅、頌の垂なり)」と述べている。勿論ここに表されている評価のあり方は、今我々が基準とするものとは全く違つてはいるが、芸術のあり方から見れば『詩經』に継ぐ物であるといつていのであるから、これに勝る賛辞はないし、其れを作る班固としては大きな自負であり自信である。事実班固は『兩都賦』の序文で、「賦者、古詩之流也」といっており、この「古詩」とは当然『詩經』のことである。また賦にたいする賛辞を現代の論著の中から挙げるとすれば、吉林大学出版社が、趙明 楊樹増 曲徳来の主編で、1998年に出した大部な『兩漢大文学史』や、北京の東方出版社が2000年に出した、何新文『辞賦散論』等は『詩經』以降唐代に到るまでの間の芸術上の一代高峰を極めた物として、賦を論じている。

賦の持つ問題点

歴史的な文学遺産としての賦が、中国文学史上でマイナス評価しか与えられないと言うことは、今までの或いは他の分野での漢族の自己文化に対するゆるぎない自信と自負の持ち方から考えてありえない。故に文学史上における評価の大部分は勿論最高の物である。ただ上記のマイナス評価の論拠となつたこと柄が実は、六朝時代以降、一部の特別に賦に関心を寄せる人々を除いて、賦が急速に衰退し顧みられなくなっていった原因でもあることを考えると、そ

の点もいまいし考察しておく必要があるであろう。

また賦は当時の世の多くの人々が、其れを高く評価しているにも係らず、歴史上の文人達は賦に対してあまり深い鑑賞眼を費やしてはこなかったかに思える。例えば『文選』に付けられた五臣注や、李善の注などを見ると、その説解にあたっては『毛詩』、『楚辞』等の引用は数多く見られるが、漢代の賦からの引用は、枚乗 司馬相如 東方朔 劉向 楊雄などと言えども、その数は極めて少ない。この事実は賦にたいする評価が歴史的に低かったと言うことを意味するのではなく、寧ろ一般の人々とまでは言わなくても、普通の文人達にとってもあまり親しめる物ではなかったということの意味しているであろう。

そしてその原因もまた、賦の衰退した理由と重なる物である。1993年に北京大学出版社が発行した、費振剛、胡双宝、宗明華が輯校の『全漢賦』は漢賦としておよそ300篇を収録し、作者は90名に達している。漢代に賦がどれほど隆盛を極めたかと言うことを、今に残る其の数からも判断できるというものである。それほど多く作られた賦が、唐代以降は殆ど其の姿を消してしまうことになるのである。今その原因と考えられる点を幾つか簡潔に挙げてみると次のようになるのではなからうか。

1. 見え透いた王侯賛美

見え透いた王侯貴族賛美が鼻につく。この場合の賛美とは、王侯その人自身に対する賛美に止まらず、その庭園及びその中にある全ての個々の物、宮殿及びそれに使われている一本一本の柱に至るまで、またそこに仕える文官、武人を始めとする従者たち、またお側に控える女官、美女にまで及んで、その賛美は最高レベルの高みにまで上り詰めて、殆ど行き着く先がわからないと言う具合である。貴族、名門、門地は唐代までは何とか存在しえたが、科擧の制度が実行されるに及んでからは、更に商人・町人の時代といわれる宋代になると、それらは急

速に影をひそめてしまったが故に、当然王侯賛美そのものが現実性をなくしてしまったのである。勿論そうした時代以前であっても、王侯とは無縁の世界に生きていた多くの文人達、とりわけ中国の文芸世界の各王朝において先駆的役割をになっていた隠遁的知識人にとっては、早くから内容的には無意味に写っていたに違いない。ただこうした極度の賛美は、多くは賦の中の登場人物の言葉として表現されているのであるが、しかしその言葉も、やはり賦の中に登場するより高い見識を持つ者、賢者によってたしなめられ、諭され、それを発言者も理解し反省すると言う筋立てで終わるのであるが、要するにそうした安易な理解と反省自身が見え透いた甘さになってしまうと言うことであろう。

於是酒中樂酣、天子芒然而思、似若有亡。曰、嗟乎此大奢侈。朕以覽聽餘聞、無事棄日、順天道以殺伐、時休息於此。恐後葉靡麗、遂往而不返。非所以爲繼嗣創業垂統也。(是に於て酒中ばにして樂 酣 となり、天子芒然として思ひ、亡有若きに似たり。曰く、嗟乎此れ大いなる奢侈なり。朕れ覽聽の餘聞に事無くして日を棄つるを以て、天道に順いて以て殺伐し、時に此に休み息ふ。恐らくは後葉靡麗して遂に往きて返らず。繼嗣の爲に業を創じめ統を垂るる所以に非らざるなり。)

於是乎、乃解酒罷獵、而命有司曰、地可墾闢、悉爲農郊、以膽萌隸、墮墻填塹、使山澤之人得至焉。實陂池而勿禁、虛宮館而勿仞。發倉廩以救貧窮補不足。恤鰥寡、存孤獨。(是に於てか、乃ち酒を解き獵を罷め、有司に命じて曰く、地の墾闢す可きは、悉く農郊と爲し、以て萌隸を膽い、墻を墮して塹を填め、山澤の人を使得至るを得さしめん。陂池を實たして禁づる勿れ、宮館を虚しうして仞つる勿れ。倉廩を發きて以て貧窮を救ひて不足を補へ。鰥寡を恤れみ、孤獨を存む。)

これは『子虚賦』の最後の結末に繋る部分で

ある。今までの奢侈を、帝が突然反省し子孫のためにこんなことをしては、それが習いとなって後々の政治の遂行によくないということで、「学」の方面での遊びに切り替えるのである。

〔天子〕游于六藝之圃、馳騖乎仁義之塗、覽觀春秋之林。……脩容乎禮園、翱翔乎書圃。述易道……〔天子〕は六藝の圃に遊び、仁義の塗に馳騖し、春秋の林を覽觀す。……容を禮園に脩め、書圃に翱翔す。易道を述べ……〕

これは前掲の「反省」に続く部分であるが、内容的には極めて興味深い。当時の帝にとって、学問愛好、つまり六芸に秀でることはとりもなおさず人格の完成を意味するのである。仁徳などの徳目の完成への努力は、為政者として決して怠っては成らない物なのである。帝王学は何よりも「学」から始まるのである。

於斯之時、天下大説、郷風而聽、隨流而化、卉然興道而遷義。刑錯而不用、徳隆於三王、而功羨於五帝。若此故、獵乃可喜也。若夫終日馳騁、勞神苦形、罷車馬之用、抗士卒之精、費府庫之財、而無徳厚之恩、務在獨樂不顧衆庶。忘國家之政、貧雉兔之獲則仁者繇也。（斯の時に於て、天下大説^{よるこ}び、風に郷^{むつか}ひて聴き、流れに隨ひて化し、卉然として道を興して義^{うつ}に遷る。刑錯^あきて用いず、徳三王より隆^{さか}んとなり、功は五帝より羨^もかなり。此の若き故に、獵は乃ち喜ぶ可きなり。若し夫れ終日馳騁し、神を勞し形を若しめ、車馬の用を罷めて、士卒の精^{そこな}を抗ひ、府庫の財^{ついで}を費して、徳厚の恩を無からしめ、獨り楽しむに務めて衆庶を顧ず。國家の政を忘れ、雉兔の獲^{むさぼ}を貪るが若きは、則ち仁者繇らざるなり。）

これは『上林賦』の後半から最後の部分であるが、上帝がいかに人々をいつくしみ、それをいかに人々が喜んで受け入れているかを描いた物である。此処には、「たしなめ」の部分は無

いが、それは前後を通じて、帝自らの反省と言う形で描かれている。またそれを評する齒の浮くような絶賛は、恐らく当時の一般庶民が聞けば、ただの苦笑いでは済まされなかったに違いない。ただ幸いなことに当時庶民はこのような賦を目にすることも無かったし、耳にすることも無かったであろうから、これによって心を波立たせることも無かっただけである。またたとえそれを目の前に突きつけられても、多くの人々は文字そのものを読むことさえ出来なかったであろうし、またたとえ文字を幾つかは知っていたとしても、こうした文章を理解することは出来なかったに違いない。そして知識人のうちにはこうしたものを目にする機会に恵まれた者もいたに違いないが、朝廷内とは何のかかわりも持たない者たちはどんな思いでこれを読んだのであろうか、中にはこれは芸術とは無縁であると感じた者も多かったに違いない。

司馬相如の『子虚賦』や『上林賦』は、賦の中では古典中の古典である。しかも賦の歴史から言っても初期の作品に当たる。こうした最も初期の、最も優れた作品から既に、一般庶民の感覚からは乖離していると言うことは、これより後の賦の推移を象徴しているようである。

2. 宮廷内外の際限の無い広大さと華美を描く

広大、華美を誇るという性癖は、世の東西古今を問わず、この世に君臨した凡ての支配者が持っている物である。故にその支配者をとり巻く凡ての環境を取り上げて大いに持ち上げるとは、その支配者の自尊心をくすぐり、作賦者にとって、その支配者から点数を稼ぐには無くては成らぬ技術といえるであろう。例えば、司馬相如の『子虚賦』は、最初からそれが現れている。

臣聞楚有七澤、嘗見其一、未睹其餘也。臣之所見、蓋特其小小者耳。名曰雲夢（臣聞く楚に七澤有り、嘗て其の一を見るも、未だ其の余は睹ざるなり。臣の見る所は、蓋し特に其の小小たる者のみ。名つけて雲夢と曰う。）

という具合である。このことは戦国縦横家の弁舌に既に多く見られるものである。ただ戦国縦横家の場合は、それによって王侯に取り入れた後、自分の戦略を披瀝し、説得し、自分を取り立ててもらい、そうして最後には、自分がその戦略のとおり敵と戦って勝ちを得なければ成らないと言う目的と使命が付いてまわることになるのである。しかし賦の場合はそれとは異なる。即ちそのような後に控える目的、使命が無いのである。つまりそれゆえにこそ際限が無いのである。ただひたすら大きく、華美に持ち上げ続けることによってはじめて「支配者を表現する」と言う目的は達せられるのである。

案節未舒、卽陵狡獸。蹴鞏蛩、鞞距虚。軼野馬、轉陶駘。乘遺風、射游騏。倏伸倩涑、雷動衆至、星流霆擊。弓不虛發、中必決眦。洞胸達掖、絶乎心繫。獲若雨獸、弁草蔽地。於是楚王乃弭節徘徊、翱翔容與。覽乎陰林、觀壯士之暴怒、與猛獸之恐懼。徼紂受誅、殫睹衆物之變態。(節を案じて未だ舒びざるに、卽ち狡獸を陵ぐ。鞏蛩を蹴り、距虚を鞞ぎ、野馬を軼し、陶駘を轉ぐ。遺風に乗り、游騏を射す。倏伸倩涑として、雷動き衆至り、星流れ霆撃つ。弓は虚しくは發せられず、中たれば必ず眦を決す。胸を洞きて掖に達り、心繫を絶つ。獲は獸を雨らせるが若く、草を弁い地を蔽う。是に於て楚王乃ち節を弭めて徘徊し、翱翔容與たり。陰林を覽み、壯士の暴怒すると猛獸の恐懼するとを觀る。紂を徼り誅するを受け、殫く衆物の變態するを睹る。)

これも『子虚賦』からの引用であるが、楚王の狩の有様を描いたものである。此处で興味惹かれるのは、各場面における表現の誇大さである。このような大げさな描き方は、『子虚賦』に限ったことではない。この後の『上林賦』もそうであるし、以降漢代、六朝に亘って作られた賦全体に通じる特徴である。少し別な言い方をすればこうした描写は賦の存在価値の重要な一つであると、いえるのである。もしこのよう

な誇張を否定すれば、其の時から賦は存在し得なくなるのである。

楚王乃駕馴駘之駟、乘彫玉之輿、靡魚須之橈旃。曳明月之珠旗、建干將之雄戟。左烏號之雕弓、右夏服之勁箭。陽子驂乘、嬖阿爲御。(楚王は乃ち馴駘の駟に駕し、彫玉の輿に乗り、魚須の橈旃を靡かせる。明月の珠旗を曳き、干將の雄戟を建つ。烏號の彫弓を左にし、夏服の勁箭を右にす。陽子は驂乗し、嬖阿が御となる。)

これは獵に向かう楚王の華麗ないでたちを描いている。此处には、神話上にしか登場しない人の名前や、動物や、「干將の雄戟」と言うような歴史伝承状のものが現実の物として描かれている。それは当時の漢の上帝の獵について描いた『上林賦』についても全く同じである。これはもはや「誇張」ではない。この表現自体が一つの架空の物語となっているのである。物語とは文学と言うことである。つまり相如は賦を通して実際を描いたのではなく一つの文学作品を作り上げたのである。その意味で相如は非常に優れた文学的構想家であり表現家であったと言うことが解る。ただ残念なことはこの作品を見た武帝が、それを武帝自身つまり自分の実際の有様を描いているものと理解してしまったことであろう。『文選』の注によると、この作品を始めて見た武帝は、この作者、即ち司馬相如と時を同じくして生きえなかったことを大いに歎いたと言う。しかし相如が現存の人であることを知って、それから武帝と相如の出会いが始まったと言うことが伝えられている。恐らく相如は、この作品を作り始めた時から、ひとつの文学作品として製作したのであって、まさかそれが直接武帝の目に触れるとは思ってもよらなかったのではなからうか。そして更に残念なことは、以降の作賦者達の多くが、相如のこの作品のまねをして、最初から王によるこぼれる「王侯賛美」をあてこんで賦を作るようになったということであろう。

於是鄭女曼姬、被阿緋、揄紵縞。雜織羅、垂霧縠。襜積褰縵、紆徐委曲、鬱纒谿谷。粉粉袞袞、揚施戍削。蜚織垂髻、扶輿猗靡。翕呶萃蔡、下靡蘭蕙、上拂羽蓋。錯翡翠之威蕤、繆繞玉綬。眇眇忽忽、若神仙之髣髴。(是れに於て鄭女、曼姬、阿緋を被ぶ^かり、紵縞を揄く。織羅を雜之、霧縠を垂る。襜積、褰縵、紆徐として委曲し、鬱纒として谿谷のごときなり。粉粉袞袞として、^{そで}褌を揚^あげること戍削たり。襪を蜚^{より}ばして、輿に扶^たうこと猗靡たり。翕呶萃蔡として、下には蘭蕙靡き、上には羽蓋を拂ふ。翡翠の威蕤たるを錯^{まじ}へ、繆繞たる玉綬あり。眇眇忽忽として、神仙の髣髴たるが若し。)

これも『子虚賦』からの引用である。宮廷の庭園で帝に寄り添う美女達を描いているのであるが、その描き方のこまやかさに圧倒される。此処には女達が美しいとは何処にもかかれていないが、またその纏っている衣装が美しいとも何処にも謡ってはいないが、これらの表現の細かさ、こまやかさのみによってそれら凡ての美しさを想像させ得ているのである。こうした場面は凡て全くの想像に過ぎない。しかしその表現には実際が透けて見えているような気がする。それは相如の普段の生活上での観察眼の確かさを物語っている。中国文学史にはこれまで多くの作品が残されていたが此処まで事物を細かく見つめた結果を思わせるようなものは無かった。これは全くの推察でしかないが、司馬相如はそれまでの中国古代の知識人の中で最も優れた観察者であったに違いない。このことは相如の作品全体に亘っていえることである。この点もその内容とは別に、相如の作品の尽きることの無い魅力を鑑賞者に与えてくれている理由の一つである。

3. 馴染みの無い多くの物品名

この点は、賦をして事典・辞書と変わる所なしと言った評価しか与えられない原因となつたのであるが、一般の人には到底想像もつかないような多くの動植物の名前や、鉱物、玉石、砂

の名などの羅列が人々を怖じけさせた。賦に登場する獣の類は、普通の文人達には全くなじみのない物であったに違いない。殆どのものは見ることは勿論、その名を聞いたこともなかったという物が多かったであろう。事実それらの多くは、ただただ想像上の動物や植物であって、実際にはこの世に存在したこともなかったし、当時も存在していなかったという物も多いはずである。ただ初期の頃は、鑑賞者にとってそうした世界が現実に存在しているかどうかは問題ではなく、ただ目くるめく甘美な、そして華美な、物量の世界に心をうっとり遊ばせることができるだけで、大いに満足を与え得たであろうことは想像に難くない。しかしそれこそ当時の漢という王朝が西方経営に乗り出し、今まで知らなかった異邦世界の文化や物産に身近に接することができるようになってからは、その観察眼の確かさは裏腹に、人々は賦に表現された世界はあまりにも現実からは乖離したもので、ただの想像の産物に過ぎないと言うことを悟ってからは、その興味が半減したことは否定できないであろう。特に後代の隋唐の五言七言の絶句や律詩が表現した世界は道家神仙世界を扱ったものもあるにはあったが、殆どは現実の、見たままの景観を踏まえた作風であることを考え合わせると、六朝期の末期に賦が衰えていくのは一層理解できるであろう。

其土則丹青、赭堊、雌黄、白垩、錫碧、金銀、……其石則赤玉、玫瑰、琳琅、昆吾、瑊玕、玄厲、礪石、碣砮。

其東則有蕙圃、衡蘭、芷若、芎藭、菖蒲、沆薺、蘘蕪、諸柘、巴苴。

其南則有平原廣澤、登降陟靡。……其高燥則生葦、薊、苞、荔、薛、莎、青蘋。

其西則有湧泉清池、激水推移。……其中則有神龜、蛟蠃、瑇瑁、鼈鼉。

其北則有陰林、巨樹、榎杣、豫章、桂椒、木蘭、檠離、朱楊、檀梨、栲栗、橘柚芬芳。

其上則有鸕鷀、孔鸞、騰遠、射干。

其下則有白虎、玄豹、螭、羆。

これは『子虚賦』の物品名だけ羅列的に書かれたところの引用であるが、この部分だけを整理してみると、土は6種、石は8種、香草8種、乾燥地の草7種、亀類4種、樹木10種、大鳥類4種、猛獣4種である。これだけの、あまり日常的には接することの無い物品の名前を相如は何処から探し出してきたのであろうか。本草学はまだ確かな形では始まっていない時代である。

於是乎、蛟龍、赤螭、鮪鱗、漸離、鯢、鮪、禺禺、鮪、鰭捷鱗掉尾、振鱗奮翼、潛處乎深巖。(…鱗を掲げ尾を掉ひ、鱗を振り…)

鴻、鸕鷀、鴛鴦、鴛鴦、屬玉、交精、旋目、煩鶯、庸渠、箴疵、鳩盧、羣浮其上。(鳩盧其の上に羣がり浮ぶ。)

布結縷、攢戾莎、揭車、衡蘭、橐本、射干、茈薑、蓂荷、葳持、若蓀、鮮支、黃磔、蔣芋、青蘋。(結縷を布き、戾莎を攢め、……青蘋あり。)

其南則隆冬生長、湧水躍波。其獸則獬、旄、獬、犛、沈牛、麋、麋、赤首、圖題、窮奇、象、犀。(其の南は則ち隆冬に生長し、湧水波を躍らせる。其の獸は則ち獬、旄、……象、犀あり。)

其北則盛夏含凍裂地、涉冰揭河。其獸則麒麟、角端、駒駘、橐駝、蛩蛩、驪驎、駃騠、驢驘。(其の北には則ち盛夏にも凍を含みて、地を裂き、氷を涉りて河を掲ぐ。其の獸は則ち麒麟、……驢驘あり。)

於是乎、盧橘夏熟。黃甘、橙棣、枇杷、檮杌、亭柰、厚朴、栲栗、楊梅、櫻桃、蒲陶、隱夫、

莫棣、蒼選、離支。(是に於てか、盧橘は夏熟す。黃甘……離支あり。)

於是乎、玄猿、素雌、雌獲、飛蠅、蛭蝟、螻蛄、獬、獬胡、穀蚊。(是に於てか、玄猿……穀蚊あり。)

これは同じく『上林賦』から挙げてみたが、『子虚賦』よりも更に物品の名が多くなり、一層想像だけに存在する物が多くなっていることが解る。その数え方にもいろいろ説があるが、大体まとめてみると、龍類8種、水鳥10種、香草13種、中型獣12種、馬・驢馬・麒麟の類9種、果樹15種、猿・猩の類8種である。これらは目録的に並べられた部分からのみ取り出したのであるが、他の記述の部分にも多くでてくるからそれらをくわえると物品名は相当の数に登るのであろう。こうした表現は明らかに『楚辞』の流れを引いているものである。

4. 難解な用字、用語の多用

賦は用語、用字が難解な物が多く、ごく普通の文人にとっても理解できないものが多かったであろう。故に賦に対する憧れはあっても親しみをもちに至るのは容易ではなかった。2.に挙げたような物品名は、多く難しい文字が使われている。また双声、疊韻を駆使する為に多くの難解な語を使うことを余儀なくされた。それに対句、対偶の文構造を必要としたため、その点でも表現が、それまであまり親しまれていない表現を使わざるを得なかったこともあったに違いない。張衡が班固之『兩都賦』に倣って『二京賦』を作った時には「精思傳會、十年乃成(精思傳會して、十年にして乃ち成る)」（『後漢書・張衡伝』）とある。また京都賦、宮殿賦、田獵賦、林苑賦等は、何千言、或いは一万言に近い文字を費やしたのもまれではない。それだけの多くの時間と、多くの語を使うということは、作者としてはそれ程長時間に亘って、血を吐く思いの工夫と思考と、精神的な面での努力を余儀なくされたと言うことであろう。その

思考と努力とはほかならぬ、語彙の選択と配置に中てられたに違いない。また多くの物名を列挙するにはそれだけの知識がなければならない。そうした知識の獲得に費やされた時間と努力も相当な物であったに違いない。

於是乎、離宮別館、彌山跨谷。高廊四注、重坐曲閣。華棖壁璫、輦道纒屬。步欄周流、長途中宿。夷嶮築堂、累臺增成、巖竅洞房。頰杳杳而無見、仰攀椽而捫天。奔星更於閨闈、宛虹地於楯軒。青龍蚴蟉於東箱、象輿婉憚於西清。靈園燕於間館、偃佺之倫、暴於南榮。醴泉湧於清室、通川過於中庭。盤石振崖、嶽巖倚傾。嵯峨嶮嶮、刻削崢嶸、玫瑰碧琳、珊瑚叢生、珉玉旁唐、玢鹵文鱗。赤瑕駁犖、雜聿其間。晁采琬琰、和氏出焉。(是に於てか、離宮の別館は、山を彌り谷を跨ぐ。高廊は四に注ぎ、重坐曲阿あり。華棖は壁璫にして、輦道、纒屬す。步欄周流して、長途中に宿す。嶮なるを夷にして堂を築き、臺を累ねて成れるを増して、巖竅に洞房あり。頰せば杳杳として見る事無く、仰げは椽を攀じて天を捫づ。奔星閨闈に更り、宛虹楯軒に地く。青龍東箱に蚴蟉し、象輿西清に婉憚たり。靈園間館に燕し、偃佺の倫、南榮に暴す。醴泉は清室に湧き、通川は中庭を過ぐ。盤石は崖を振り、嶽巖として倚り傾く。嵯峨たること嶮嶮として、刻削たること崢嶸たり。玫瑰、碧琳、珊瑚叢生し、珉玉は旁唐し、玢鹵たること文鱗のごとし。赤瑕、駁犖として、その間に雜り聿む。晁采たること琬琰として、和氏出づ。)

これは『上林賦』の宮殿の配置、庭園における泉水、流水の有様などを描いた部分であるが、その状況を表す形容詞、副詞の多様さと難解さにはまさしく圧倒される。李善や五臣注が無ければ到底理解され得るものではない。それらの注でもわからないものも多い。こうしたものは恐らく当時の知識人であっても、或いは相当の学ある読書人であっても、あまり「よく解る」と言うわけにはいかなかったに違いない。即ち

こうしたところは略言葉の遊び的な部分ではあるが、しかしこうした部分にこそ、賦が後々の中国の他の芸術分野にまで広くしかも長く大きく影響を与え得た要素が含まれている物と思われる。つまりこれらの部分は、聴覚的、即ち音韻的な意味で重要な表現要素をもっていたものと考えられるのであり、また視覚的、即ち書法的な意味においても重要な表現要素を担っていたものと思われるが、その点については改めて別稿を持って論じたい。

5. 学と知識のひけらかしととられる

最後に上記の三点をまとめて言うことになるが、賦はともすれば作者の意図とは裏腹に、鑑賞する側にとっては、初期の段階ではともかく、そうした濃厚で重厚な内容と詠いの口吻が鼻につき、だんだんと作者の王侯への忠誠の宣伝と、知識と学のひけらかしとしか映らなくなってくると言う危険性が当初からあったのである。

以上述べてきたことは、自分自身が作賦者である六朝晋の左太冲が『三都賦』の序文でいみじくも指摘している。

然相如賦上林、而引盧橘夏熟、楊雄賦甘泉、而陳玉樹青葱、班固賦西都、而歎以出比目、張衡賦西京、而述以遊海若、假稱珍怪、以爲潤色。若斯之類、匪啻于茲。考之果木、則生非其壤。校之神物、則出非其所。於辭則易爲藻飾、於義則虛而無徵。且夫玉卮無當、雖寶非用。侈言無驗、雖麗非經。而論者莫不詆訐其研精、作者大氏、舉爲憲章。(然れども相如は上林を賦して、盧橘の夏熟するを引き、楊雄は甘泉を賦して、玉樹青葱を陳べ、班固は西都を賦して、歎ずるに比目を以てし、張衡は西京を賦して、述べるに海若に遊ぶを以てし、珍怪を假稱するに、以て潤色を爲す。斯の若き類は、啻茲のみに匪ず。之を果木に考ふるに、則ち生ずるに其の壤に非ず。之を神物に校ふるに、則ち出づるに其の所に非ず。辭に於ては藻飾を爲し易きも、義に於ては則ち虚にして徵無し。且つ夫れ玉卮も當無ければ、寶と雖へども用いる非ず。

侈言も驗無ければ、麗なりと雖へども經非ず。而して論者は其の研精を詆訶せざるは莫きも、作者は大氏、擧げて憲章と爲す。）

此処で左思（左太沖）は、現実の裏づけの無いもの、或いは現実の裏づけの無いことをいくら挙げ並べても意味が無いといっているのである。ただ「王侯賛美」や「難解語」の羅列については批判はしていない。恐らくこの二点は賦の生命であって、これなくして賦は成り立たないことを心得ていたからであろう。しかし上記の批判点を踏まえて左太沖は更に自分が『三都賦』賦を作るに当たっての心構えとして次のように述べている。

余既思慕二京而賦三都、其山川城邑、則稽之地圖、其鳥獸草木、則驗之方志、風謠歌舞、各附其俗、魁梧長者、莫非其舊。何則發言爲詩者、詠其所志也、升高能賦者、頌其所見也、美物者、貴依其本、讚事者、宜本其實。匪本匪實、覽者奚信。且夫任土作貢、虞書所著、辨物居方、周易所慎。聊舉其一隅、攝其體統、歸諸詰訓焉。（余既に二京を慕して三都を賦さんことを思ひ、其の山川城邑は、則ちこれを地圖に稽へ、其の鳥獸草木は、則ちこれを方志に驗へ、風謠歌舞は、各おのの俗に付き、魁梧長者は、其の舊に非ざる莫し。何となれば則ち、言に發し詩を爲る者は、其の志す所を詠じ、高きに升りて能く賦する者は、其の見る所を頌し、物を美とする者は、其の本に依るを貴び、事を讚る者は、其の實に本づく宜し。本づくに匪ず實に匪ずんば、覽る者奚ぞ信とせむ。且つ夫れ土に任じ貢を作すは、虞書の著す所なり。物を辨じ方に居くは、周易の慎む所なり。聊か其の一隅を擧げて、其の體統を攝り、諸を詰訓に歸す。）

左太沖の指摘の中には、王侯賛美が過ぎるとか、難解な表現や難解な辞語が多すぎるなどと言う、つまり学と知識のひけらかしではないか、というような点はさすがに無い。もしそれをしてしまうと彼自身の賦そのものが存在し得な

くなるからである。確かに左太沖の賦にはあからさまな王侯賛美は無い。『三都賦』と言っても左太沖は晋の人間である。晋は魏を受け継いだ王朝である。彼の眼目は最終的には魏都を賛美し、魏を作った曹操つまり魏の武帝を賛美し、その流れとして晋都を褒め称えることにあるのである。

それは『魏都賦』の中にはっきりと書かれている。

としかし上に記した此の点以外については、恐らく当時知識人、文人の間でもやはり口の端に登っていた批判であると理解していいであろう。

ただ皮肉なことは左太沖自身の賦についても左太沖の批判が大いに当てはまると言うことである。『三都賦』のうち特に『蜀都賦』、『吳都賦』については、やはり依然としてこの世には実在しないような動植物の列記が随所に見えるし、現実には到底考えられないような誇張された表現も各所に見える。どうであったのかと言うことについては個々で余れる余裕は無いが、ただ左太沖が指摘しなかった批判点以外の欠点はやはり多く持っていたと言っていいであろう。

「市中の紙価を高からしめた」と言うのも恐らくは流行の初期のことであって、それもやはり、他の賦と同じ運命を辿ることになったに違いない。

こうしてみると、賦が人々の口にはそう容易には登らなかったし、また中国文学史上そう長期に亘って何時の時代の人々にも愛されるというものには成らなかった理由がはっきりしてくるであろう。

6. 制作に時間がかかり過ぎる

最後に賦が持っている制作上の問題点としてあげることができるのは、一篇の賦を作るのに多大の時間を費やさねばならなかったことである。班固は一篇の賦を作るのに十年と言う歳月をかけたと言うし、左思も、晋書卷九十

二の伝を見ると、『齊都賦』を作るには一年かかっただけであったが、『三都賦』の場合は構想だけで十年を費やしたとかかれている。それでは何故これほどの年月がかかるのかというと、それは先に掲げた左思の序文にもあるように、事実に基づいたことを書く為に観察と調査に徹したからなのである。尤も、現実を詳しく観察することと、事実を書くということは全く別のことではあるが、差思は常に紙と筆とを持ち歩き、何か心に留まる事を見聞きするごとに、それを書きとめていたというからその努力は大変な物であったに違いない。しかもそこに書かれる語詞はただの日常的に使われるようなものではなく、調査し、探り出し、推敲を重ねるという途方も無い作業の繰り返しであったであろう。漢代の作賦者の中で、尤も多く残しているのは王燦、蔡邕などであるが、それで大体三十弱であり、その他は多くて十前後である。勿論、今に残っているのと、当時作ったというのはその数から言って一致しないのは当然であろうが、しかし後の唐詩などの状況から推し量るとその差は歴然としている。

賦の文学史的役割について

今まで賦の欠点と思われるようなことばかりをあげつらってきたが、これは、賦が何故に唐代以降急速に、顧みられなくなり、作られなくなっていったのかを説明する為である。しかし賦は、先にも少し触れたのであるが、中国文学史において非常に大きな影響を与えたばかりでなく、実は文学ジャンル以外の芸術分野においてこそ、その貢献は多大であったと考えられる

のである。つまり漢以降の、絵画、書法、吟詠、の発展に関しては、賦の貢献を無視しては語れないと思われるほどである。それに何よりも賦のになった大きな役割は、後世に豊富な文字（漢字）、豊富な語詞（形容詞・副詞などの表現語）、豊富な表現法（押韻・対句・対偶）を作り出したということである。即ち賦は中国文化の発展にとって計り知れない程の大きな基盤を作り上げたと言うことができるのである。それについては、論じる機会を別に持ちたいと考えている。

参考文献（文中既に上げたものも含む）

- 四部叢刊本『六臣注文選』上海商務印書館縮印宋刊本
小尾郊一『文選一』『全釈漢文体系』集英社、昭和52年
（拙稿中に引用した「子虚賦」「上林賦」「三都賦」の
釈文は凡て、『全釈漢文体系』本の釈文によった、た
だ中に引用者の考えで、表現を少し変えたところも
若干ある）
費振剛等集校『全漢賦』北京大学出版社、1993年
評点本『晋書 四』中華書局
李文初『漢魏六朝文学研究』広東人民出版社、2000年
馬積高『賦史』上海古籍出版社
曹明綱『賦学概論』上海古籍出版社、1998年
澤田総清原著『中国韻文史』商務印書館、1998年
趙明等主編『兩漢大文学史』吉林大学出版社、1998年
陳慶元『賦』廣西師範大学出版社、2000年
何新文『辞賦散論』東方出版社、2000年
柳存仁等『中国大文学史 上』上海書店出版社、2000年
評点本『漢書 十一』中華書局
鈴木虎雄『賦史大要』富山房、昭和11年

（2001年10月31日受理）